石門心學道話 女篇 下

教育
157
0

10095
教科書文庫
1
101
10-1842
200030
2464

教育学科
157
0

広島大学
教
53548
図書

心學道話七編巻之下

親父が汗あぶくよりあつて金銭財産を重てせつても精出して書物を讀せて博学ふしておいても色〳〵と義理をしらんでおいてもだうと一つの心がけがつかぬと何のもあるぬ丈のうあつかりとおしへ給て歳貢行義作法を仕せてこゝろを心学でもさせて本心といふものを知らせておけば大丈夫まあ子の悪いを皆親の仕業娘をおてもよい所分る時分よ嫁てゆくの御後のゆつて来るとおやゞ第一こゝのあは男の幸をいろ〳〵伝とつひまれ仲人ちゞ四十位でいろ〳〵と

いふこと叔父がまでいまゞ先が出て何もうゝ言ぞうまくらまず見合ませう。仲人がいふとい七十五六歳を七十だありといふ。それでは君もあまんぞふでお使被とふ仰せると娘のまへでいふて笑せるのゝ娘ハ成程男といふものをむつゝしいものとゝんへるとゝろゝとの死ぬるを娘おやうふ愛へて亥のしやゝ第ゆかうふおゝ〜こんであく由へ向ふへいつて女〜宮新でもゝんとおまいう母ど親しゝ中くゝんか肉へ有るのでは有ろくゝぞこそいのゝも姓ひよ有とが縁でぞあつゝろふゝんか肉へくゝかとうふは因果あゆそこゝよ挿話あゞ

五通りよ夏をめゲ一ちんす学ゲ十翁算盲が五箱よ長持ゲ七掉とかゞ〜たて〜恐くと異ゲうるく放て其天狗のゆゝかそれであちゝこちゝこ注く死おゝして〜そゝらゝあゝうへぶつ注ゆう巴つて赤内中を横行せるゆへふ婢や男も仕数ゆは居ぬもあいゆゝる放うゝ十日もえぬ日ふ出ちゝい第迫出されて来ても自分のおゝへの恩いるゆは心づゝ只向ふでゆうゝ有いゝものゝゆゝふ思ふてゆゝ〜不仕合ゆ娘ちんゞ家へ一ゆゝぞゝりゝゝゆゝちんおゞあるでゆうふそんふ和ゝ居ずゝゝもうふと祈のいゝもを分て亥。何のゆへふい猿の

やうふうゝろひもを身てはあ釈ゝひつたつて居る
拾ふりの。罵ゝやのまゝくばゆてこゝ必かゝゝつて
ゝゞゝつて居るゝ。命あそのゝれだ祢ゞやゝひつ
たる。舞あゝむゞてゝるゝゝおてこんといふてゝゝ
ぱゝたゞゝりのゝゝろんといつてはゝゝゝろうゝふく
親ゝゝ引ゝゝり返ゝゝて垂てゝふ仕合ゝ娘ゝやゝと思ふて
居ゝゝといふハ時ゝんりのゝゝゝ戻ゝりまんゞゞゝふゞ平生
切ゝゝ母のゝゝ拾ゝゝゝゝゝふいゝてゝませて垂べゝゝるゝは母ゝ
ゝふゝゝのハ三男ゝゝ家ゝゝ嫁入ゝゝてゝゝゝゝはゝゝのゝゝ浅
家ゝゝんといふて一且嫁入ゝゝて後ハりふゝゝゝゝ釈ハ

あ釈ゞやゝあんゝゝのあ釈ゞあんまのあ釈ゞや
程よゝゝふ仕家の妻ゝ釈をまゝゝゝゝゝ生て戻ゝふゝ
おりゝゝゝゝゝ

たまはせんだうをでくわ第の玉をまるで藁や茅を一ぱい詰こ第じや。何のもあふ取平生指のんで
遊ものゞちゞつている。世間の人のふを可愛がる所といふいみんあるくがるのじやず度猫ゞふをかと
いゞつてあめ〜うかとの〜たうまてあげくの果
ゐは咎ふてきりふやうふるものゞ死〜踊ら〜てい
ひつたり戻〜又やつてい咎戻〜ておいて仕合
ふるものゝくと思ふて居るはあんのるやうな猫の
の愚かりといふもの皆親の仕ちんゞゞの私が毎度
出世〜やゝと大根やの皇ゞふ咎を教一て逆喜ふ
風ゞやうふるものでゞ咎といふ稚をまくゝと咎ゞうちゝる
皆親のまゝんゞゞもの

横さあゞゞゝゝて教ゝ加ゝ可ゝ愚ゝ

ゞふゞ西生ゝまゝふが可愚ゝゝば心學ふをゝさせて本心玩
初ふせて遊ゝんゝもの心學ふをかりゝゝやゝい三教の
極ゝゝゝゝ氏本心を初るだゝう石田先生ゞ氏心學
を出屋ゝさふされてゞんふ文育ふものでも志を立
ゝまゝられゝば初まるゝゝ〜てあゝまゝんゞゞふゞ性ふ
ゝゝを出ゝふされゝゝ方ハ出ゝ初ゝゝゝ世ふされゝゝ世。
志ふ〜ゝ氏ゝゝふ〜ゝを子供ゝ出ゝ若ゝいものゞ出ゝふゝき

るゝ。あれはのこゝろ。うゝ。海のんごう。女郎。笑ゝう。
ちゝ。を。ゆる。親の仕ちんぶ。のゝ。ゆ。あれの。ちゝ。れゝ。や。
あんとおもふこゝ。ろ。留ちゝ。ひ。親。情。樣。は。土。間。の。ま。つ。
ちゝ。ゆつても。海とゆつゝ。ちゝ。の。ハ。悪。いゝ。ものゝ。ゝ。や。ゝ。ふ。ぞ。
あ。ま。ち。ハ。の。ま。せ。ち。も。あ。ん。と。ま。ゝ。ゝ。め。ん。ハ。ゐ。ま。て。ある。

模さぬよ親ハちゝ。ゝ。ゝ。ちゝ。ゝ。ゝ。ゝ。に
蟹のゝ。ゝ。ゝ。

娘がなて苦労で枕もろふ釈ら眼がつぶへ
あく成まゝ　かゝる苦ど苦労致すして療治なふ
より神は佛は祈誓ゝ〳〵　身よ命をさゝ上て
信心をすゝゝして良くよをを乞〳〵　たまどを
願もを発あく兵心を痛めるどうゝ婦がごとゆう
うゝ安てまつゝこは迚のたゝ迚和で俗で眼の療治は
功者あゝものがゝとゝふををつてそふを夫よ一
番ん考て嘆ひ〳〵そふて自ら身をゝ引て連て
ゆて見せまゝ〳〵ゝゝ男は内濁眼ゝゝふて佐よそひ
ゝゝふ病でゆゞ病が治ゝ療治をゝゝゝふをゝゝぬ

るゆはゆゞゝぬが一通りの業では迚もゝゝゝぬ療程迚ゆゞ
へるゞ薬張おゝ病が拵一ゆゝをぬゝゝふゝゝ婦がゝゝふ
ゝゝふおゝゝゝゝゝゝゝゝゝふゝふ致て為ゝゝませふを
ゝゝふて内へ庵ゝゝも勇迚の弱ゝゝゝゝゝゝゝゝ
教業もゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

又てゞ毒ゞお粉ハ薬あいのゝるゝやうすゞ上ゝあ
がゝるゝらゝてゝされては仕方もあんゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝてゝさゝと摩擦らゝまゝたゝゝゝ摩擦
てくれゝゝゝあゝゝゝゝても薬を痛めるゝがりて思
薬あるまんゝおゝゝゝゝゝゝんゝゝゝ優ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あるもちろん仏番くまんと思うことあるを代りふ
やりくらべも若し悪者もろくしゆうはそくをて
為る由よおろかとおりへども兄弟の中でもこれ
心をくばりうりてだまつて為くるそふして善きべ
外の業も立まものくめそんあるの祝儀の席あるとあ
りて出若男あるつ教まんと涙よまぐるひそく
をあるしよ世のさちあきを立美てあんまよくをえ
あふて暫く泊て為りまるしさぶかくして為ても諸の
物ぬるの由へ一刹もさやんが祝儀の酒と婦が弟達人を
教んで妹を吉原へ勧めまをよやりまして。その主人の
金を懐中して忍び通をぶり嫌しいやう嫌しい
やうで是のをとびも忘まて池のをとへ投て医者の雲
買へ入りまして病を探て入をべ金いあるしをもし
被をあるよてえても薬を待ても一向ふへぶ懐の懐中
して為ふおを送をあんが家ふ為で為る由為しく
りのとえへるしはおりへども佐方あるつ外へ出てり
をふをふ交のとあるとをきふふく入為をあるふ
粗末のやうよ出てさのしても人通ふをが見るあれば
殺へおふしてもあふをづいあるぶをふをあふふ
扶南千幸苦して妹よ勧めまをとさせふふく

出家と今をおもひまゝにくらし肉へかへて祝儀ハ家
より表家の味なも何の面目あてにすまふ代表なるあハ
死ぬより外に仕方ハあいとおもひこんで居てまぶいも
しくとたゞ居らるゝ人の方なもあるまゝこの〳〵死
ぬる事ハ永代橋と云ふ橋を極めて永代橋へ行く時ハ
ちよふ初夜五人連なれ帰ゆ後て孫ゆ宵宮も打よ〳〵と
探干ゆまををて既ゆかゆよと存じまゝ〳〵がおりひ
まゝ世ハ我あき跡月のふ自出家一人のそくさん猫ゆ妹
ゆあ〳〵ひ雅を便とまら必ゆ〳〵ふもあん命ゆさゆく
あ〳〵くハあんが死んさきで真逆のかゆ人ゆ何と言ゆ
仕ゆ〳〵ゆ〳〵世よゆさ居ゆくさんゆゆ寄の居ゆ〳〵と
勧め〳〵て居る味あハふゆあん婦とあんそ仕かゆ〳〵
これもそれも苦世の約束と探干ゆ考かつて名ハ居
思ひ出〳〵て迷も生てハ居ゆ〳〵ゆ分とおりゆ〳〵川て
分つゆゆ〳〵ゆる向ふのゆ〳〵ゆ約束ゆを思〳〵て朱
ゆのあゆ〳〵ゆ月ゆ〳〵ゆて〳〵ハ後ゆ〳〵と既ゆかゆ〳〵と死へ
たふゆ〳〵ん〳〵ゆの男ゆ死ゆ〳〵かゆゆまゆつのとだき為め
見ゆまつゆ〳〵と〳〵ゆ〳〵ゆ武お慈の両人の子息で深川一通ゆ
居ゆまゆ〳〵遠目ゆ世の探干ゆゆれて居ゆを見ゆかゆ
見ハゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆで身を投ゆゆと

いふふうるであろうこんあて拍子をはてこんりょ
こ見をゑめてこめこのでばざうまんそふをゑとこ世が
どふでこゑここ教ってうこまこまこまんのを接ぶで
こつかりこおこてこまこばこんゆこん世でもこんいふ
髭の差けのふこ学ここ出ここ日こおもひこのこここ
何で死こふここ大こうこでこんもこ肖こひ様ば世の心
こここ死こふこまで思ひつめここのでおろふ縁こも後合
こここまづ一通りいふてこやこつこれて祖のこここふ
涙をふんこ学こまここまここ祖を隠さず出こ
中まんこいふて祝の眼鏡ここ妹の子の代を義ここ
こここ家こまず言葉こここ嘆でこん拍子こ
氏男も二人の世代孝行を感心こてはて居まったが何と
おりここ膝こ重五文出こていふこまここ死ぬこ
及ばぬ先こあこば言こが沸こ出こつこ拍ていて
業をのませ家中こふここ母をこつこれて世も飛こつ
中こふ涙こここここふ月こまんここ命こ惜こ
出ぶこまま人が氏五文の金があこば三人の命こ助こる
清恩何ぞの教誰こ初ここ方のこ載く分こ出ぶこ
ませんがつふ法まつて来こ時あこば辞退こここん
いたぶこまんが世先て後日こ出礼こあここ上こふ

そんじまゐらそふでは名所を彫りまして売ってふ
あるじまする男イヤ〳〵おまへ様は隠して遊びまゐる
礼おいとふて迷惑をする名所をよくもへつまちらかり
散らして行るもあるふ縁があいはゝ逢ませふまする
ちつともおくゆかしゐ事也　釈法が業して居ぶまを
そんなるゝゆくまゐと言捨てえあるくゐさつ〳〵と
改て行まゐのゝ約束の釈社又へるまでねむで帰く
まゝこゞ釈も又るのゝ宿へゆって逆く仏さ二位殿様
を出せば釈又も縁を結ぶしてそれへあぶあいるの其
まあ此方へ何の人でもてゝふ感心お人もあてゝうの

ぞふで縁があつて此礼おとゆゝくんるるのこ出ーかぐら
ぞ釈へ休んで居る釈のゝ摩治はかりゝ変者心の通
しゝのゝ業の験のあつてこのゝ修程ゝつて釈又の貌病
も直つて平生通りよあゝまゝしゝ手後も附く帰て
らまゝゝ若い男ハ又変へて居るといふのゝぞふこのゝして
一度ハあつて礼をさゝんものと毎月〳〵言ひさる日は
おいゆゝで帰も往来の人ゝ心を付てあるもそ人が変ふ
かとは普ゝまを付て居まゝゝゝ法ゝぞ仏さ人のも
意取て千度三年の百ゝまゝゝ文化四年卯の年八月
十五日八源川八幡の社礼で此ぞうまゝ七ぞともかも人の

往来多い中にふらふら人の通るのもあるふかと往来の風をうけて居りまいたご単衣を着て風をかくげて肩よ背英の風呂敷をかぶりてもうくと通る人ゞあるをちろうとみるとまた人よ遠ひかいうら嬢を恵まちさうで矢出して恵外あるがちと出やすゝ

のゞ出ぎりますゞるゝ三年ぶよ永代橋のうへで何月のつひたれ恵出まへうら裁さとのゞ出ぎりまのゝ

ゞも出ぎりでは出ぎりませんら男女ぶりのあを

そんあのゞがありまゝと親父どの出嫁ふとふで出ぎ

まゝたりとふうくそんあうよ遠ひらかいと

ゝ出ぎりまのゝあうぞふぞ出ぎ後出ぎかされてゞさりませ

イヤちとゝ恵ぐるのゞ出ぎのゝ又彩りませふ今日ぶぞふぞ出ぎ

ゝかされてゞさりませいやゝとやても出ぎかさまあゝまのゝあうぞ出ぎるゝてうせませんと無理ふ

他をゝして離さぬやうふ殺さてのう投あゝ見ゝ遠ゝと

親父さぬゝ年ゝ孝ゝと出ぎかさぬゞ出ぎかされまた

ゝとつふと奥あうふ親父も親でゝやゝくゝうふん

分て出連ゝ親ゝ始ゞ出ゝ出ゝ金ゝ始

の命の親私の眼病平癒もを出ぎ祭ゝつぞ出ぎかゝて

せめて一言ゞ出ぎ礼もゝ上ゝと毎ゝ二人で出

さぬようもあるまいせんぐつくのごとくさまといふるも
如く祝ひ祝で正礼をゆてあるまゝとイヤも正礼ども
癪へまいすゆふてゆふ為ぎの事をあへまゆろまいせふイヤ
ゆるゆるいこふせぬまづえ告しい内あんごもこちへ
ゆよりゆされまいせ今正礼を言ひばえこゆてゆ財も
ありません男その正礼は正分あふゆてよんゆゲごゆ
まのす私も手財までい祝のたゆえこ金を盗こ出して
学親は費ゝ何ともゆずえ長ものゝこが手財路ゆ
遠の信実あるれゆ為ゆの性をゆて扱も死ゝいゆ
じゃ今ここの行絶を後悔してその財出ゆ心ゆ

コレは強ふされ出せ今でいこんゆちこたれゆ形をして
自分で風呂敷色を着おつてきをんと同じゆうゆ持
一ゆ紀よあつこいひとへよ正分の正張ゆの正張出ゆ十あ
の金じゃかられぬそれゆでい祝のえ実見も所直の数
馬の耳は風沙がたつこ一言の正張ゆの性が強法ゆ為て
併乃ゆまゝこことのふゆ見ゆれゆこと正分あふ法れ
いふてよんのでは正ざうます原門まで為ゆ法文拾て
行ゆ行ゆ今日はふは悔ゆませふとのふ内は酒や
肴を出ゝてゝこゝであます四へ技ゆ一ゆ呑二ゆ呑んで
居る内は外の方が何ゆ騒ゝゝゝい拾ゆで人が多勢

近て切のく出るものでもなかとおもふて出てゐると命ふ
かくそち巻で書附てかけて来る人は何もでぬざり
ますと申と今永代橋が落て殿〳〵い人死じやと
いふてゐもてゆく後で考へてゐると手甲かけとめら
きてをゆをぬぎふゆくと丁度永代橋へかゝる時分でおそ
こゆまゝ芸州若殿悪者動殺でにげうまそこ
があいぎまもなくよ長くい時和おぎ死んのでぬざり
まゝ人の命を助て居てかゝるとのふ接を蔚ておいと
このゝ己が命も助るこのふものがたへまゝ〳〵ぬすくと
変へ永代橋助つくれも永代橋天網恢〻疎而不漏で

天道様の目のくハ目が荒いゆゝでもたつぬるゆハたゝん
怠ろ〳〵いものでぬざりまゝ〳〵あゝ手甲も因ゆて
その手を出〳〵まゝたゝ手甲の釈文の中ゐいそふ
〳〵てゐもびそちの内れ二人をそちの命れ親文そちの
そちの入代くもそ殺のりげ。そふの文寓実のそものは
ゐ来親類同様よ法をもふゝがゐいとゆゝ出ゐてゝ
吉原の妹も待出〳〵て永く世伝をゆきまゝたのゝ
今でゐ繁昌〳〵てあるまゝとゆまそふゐるとそ
も悪も必ず報ハるものゆあ遠あゐるゐるもひ
ゝりかゝつてゐるゆよあり。よいゆもいつゝり返つて

悪いものよあるもたつて心の一つかゝ向ふのゝ来る禍福ハ福禍でハあれ已が身うゝ出て福禍がまの福禍と
いふの天道様よこのゝず依怙贔屓といふ事ハ
あれこれを乾坤必無私と申ます先なぞの事ハ
ますうゝ今日ハ是きりよいゝまれ

心学道話七編巻之下終

三都
發兌
書肆

伏見屋茂七郎
須原屋茂兵衛
河内屋喜兵衛
敦賀屋九兵衛
敦賀屋東七
敦賀屋彦七
秋田屋幸助